



睡蓮鉢

猫柳ハヤ

彼の翡翠色の目を見た瞬間、僕は全てを理解した。

僕が最初に希(のぞみ)を見舞った時は、すでに彼が床について三ヶ月ほど経っていた。幼馴染とはいえ、毎日のように遊んでいた幼い頃とは違って、時が経つに連れ僕に新しい友人もでき、自然と一緒にいる時間も減った。

希の存在すら僕の中から消えかけた時、彼の母親が訪ねてきた。

「見舞ってやっては貰えないかしら……。」

心労でやつれた表情の彼の母親に頼まれて、最初僕は「一回ぐらいなら」と見舞う事を了承する。深深と下げられた彼女の頭を見て、喉が乾いたのを思い出した。

希は広い和室の真ん中に敷かれた布団の上で半身をを起こしていた。枕元には花をつけた睡蓮鉢が置かれていて、殺風景な部屋の中に適度な湿度とやわらかな香を飾っている。通された部屋の廊下側の障子は開け放たれていて、余計な枝一本ないように整えられた庭が見渡せた。しかしこの風景だけを三ヶ月も見続ける事は僕にはできないだろう。息苦しい厳格さがそこには有った。

目が合った一瞬、途惑った表情見せた彼だったが、聞き慣れた良く透る声を僕に向ける。

「母に頼まれたんだろう。申し訳なかったね、ここ何年かは声すら聞いていなかったのに。」

「別に。でもこんな事になっているなんて知らなかった。」

できるだけ平静を装って僕は希の側へ座った。細く白い手首と、尖った顎が痛々しい。

不意に彼の腕の中で銀灰色の艶やかなものが蠢く。滑らかな動きで僕の前を通り過ぎるものが猫だと気がつくのに数秒を要した。

「綺麗な猫だろう。僕の唯一だ。」

そう言いながら猫の後を視線で追う。猫は庭の中へ消えていった。

「蝶が舞い込んで来る。でも、ここからだ少しの間しか見られないんだ。」

希は誰に言うでもなく一人ごちている。彼の口元に浮かんだ微笑は、僕の脳に一抹の不安を遺した。

睡蓮鉢に浮かぶ白い小さな欠片は、花びらだったのだろうか？

しばらくして再び希を訪ねた。相変わらず半身を起こして静かに佇んでいる。腕には銀灰色の猫。

「また来くれるとは思わなかった。」

僕の顔を見るなり自嘲気味に笑う。曖昧な笑みを張りつかせて、僕は彼の脇へ腰を下ろした。

猫はまた庭に出ていく。翡翠色の視線が僕を射貫いた。猫を見送った僕が希に向き直ると、睡蓮鉢が目にとまる。水が僅かに濁っていた。鉢の周りの羽毛が、見てはいけないものの存在を裏付けている。

「小鳥の音がする。姿は見えないけどね。」

障子に切り取られた箱庭の空を見上げながら、希は静かに笑った。

赤褐色の水は何を飲みこんでいるのだろうか？

そして、今日。

「君はこれからもここへ来てくれるのかい。僕を見舞いに。」

真っ直ぐに僕を見つめる希の瞳には、僕の姿は映ってはいなかった。

銀灰色の猫はいない。

睡蓮鉢の中で花卉のようになった蝶の欠片も、無惨な鳥の屍骸も、希が欲したものだ。ゆっくりと、そして着実に正気を失いつつある笑みを浮かべながら、腕の中の動く事のできる自らの分身に語り掛ける。

アレガホシイ

分身は主である希の意思を忠実に再現する。

キミガタメニ

そして彼にとっての僅かな外世界である睡蓮鉢に捧げるのだ。

右目の視界が朱に染まる。薄れいく意識の中で、睡蓮鉢に浮かぶ眼球と、希の腕の中でぐるぐると喉を鳴らす、銀灰色の猫の姿を見た。

キミガ タメニ

キミガ ココロノ ママニ

キミガ キョウキラ

スベテ ワガミニ

...了

ここが何処だか分からない。

そこに何かあるのか分からない。

自分の存在すらも見失いつつある朦朧とした意識の中、差し伸べられた温かな腕を今でも記憶している。

彼は何時の頃からかその閉じられた部屋の中に居た。

いや、部屋はいつも開け放たれている。それにもかかわらず、外の空気すらも入ってこれないほど、その部屋は閉ざされていた。

時間と空間から置き去りにされてしまった部屋の中で、彼は静かに微笑んでいる。

「君は僕の唯一だよ。」

掛けられる言葉は優しく、触れられる体温は僕の中に温く堆積していく。

「僕も貴方が唯一です。」

何度も繰り返した僕の言葉は彼の元には届かない。そういう凄烈さが彼の周りにはあった。

「蝶が、蝶が飛んでくる。」

ある日、彼は宙を見上げてそう呟いた。襖で切り取られた空には、何も在りはしない。

ぐらり。

視界が歪む音がする。

これはあの時と同じ恐怖。自分の存在が薄れ逝く恐怖。でも何故か温かい。

僕は彼に腕にそっとくちづけると、部屋を後にした。

彼の後ろに見えるのは、僕が見た闇と同種の歪み。あの闇を埋めることができるのは、僕だけ

。

手に入れた白い蝶を手渡す。

「この翅があれば、僕はここから出られるのだろうか、」

彼はそう言うと徐にその翅を破いた。白い欠片がはらはらと睡蓮鉢に落ちる。落ちた欠片は沈む事なく、水面を滑るだけである。

「壊れてしまったね。」

腕を広げて僕を招き入れながら、彼はとても静かに微笑んだ。彼が僕を愛撫する指は細く、呼吸は儚い。

消え入りそうな彼の命の続く限り、僕は彼の欲するものを捧げよう。

彼が僕を救ったのと同じだけ、僕も彼を癒さなければならない。

本当に壊れてしまったのは誰。

あの禍禍しい死の恐怖から僕を拾い上げた貴方の為に、僕はこの身を捧げるだろう。 永遠に

。

君主(きみ)が狂気を全て我が身に—————

...了

キボウノヒカリ

貴方を見つめすぎて、
僕は僕を見失う。

屋敷と外界とを分け隔てた密な垣根を抜け、独り佇む彼の待つ部屋に向かう。庭に面した縁台とその奥にある開け放たれた障子。今日もまた睡蓮鉢から開いた花の香りが漂ってきた。

「唯今戻りました。」

そう云って沓脱ぎを越え、敷居の前で少し待つ。

「御帰り。」

良く透る彼の声が僕を招き入れた。

部屋の真ん中に、もうずっと敷いたままの寝具。その上に上半身を起こして独り佇む彼は、限りなく静謐で孤高だ。

僕はまず、彼の脇を擦り抜け枕元の睡蓮鉢へ寄り、彼の欲する〈生〉を捧げる。部屋から出ることのできない彼と、外の世界を繋ぐ為のみに存在する僕。随分前から毀れてしまった彼の微笑が、僕を捉えて離さない。

キミ ガ タメ ニ

睡蓮の花の底へ沈んでいく其れと目が合ったような気がしたが、僕にとってそんな事はどうでも良い事だった。

「おいで、」

彼に呼ばれて傍らに座る。途端に抱き寄せられ、長く華奢な指先が僕の背を辿った。

「……あ、」

声を上げる僕の頤(おとがい)を持ち上げ、静かに頬を寄せる。白磁の彼の頬が朱に穢れた。綺麗にしたつもりだったが、どうやらまだ汚れていたらしい。僕は項垂れて、目を伏せた。

「気にする事は無い。僕が望んだのだから。」

優しく儂い笑みをその薄い唇に乗せ、僕を見下ろす。しかしその瞳には僕は映らない。

ヌルイ キオク ノ ナカ

僕の中の忘れられない消滅への恐怖が蘇った。

冷えていく指先が僅かに震えている。失せ逝く光。僕の唯一。

「君は僕の唯一だよ。」

「逝ってしまうのですか、」

僕の問いに応えは無く。其処にはただの空虚な空間が存在するだけ。細く頼りない呼吸すら感じられなくなっていた。

四角く切り取られた天(そら)に溶け込む彼の意識が、最期に僕に届く。

アリガトウ

ボク ノ キボウ ノ ヒカリ

もう二度と睡蓮は咲かない。

...了